

を示すので、動的意味をもたない「かわかす」には用いられないのだろう。

#### 2.4. 手段

- (36) シャツを 日光で かわかす。
- (37) \*シャツを 日光で ほす。
- (38) シャツを 風で かわかす。
- (39) \*シャツを 風で ほす。
- (40) シャシを 日光にあてて かわかす。
- (41) シャツを 日光にあてて ほす。
- (42) シャツを 風にさらして かわかす。
- (43) シャツを 風にさらして ほす。

(36)~(43)はいずれも自然な乾燥方法であるが「ほす」は手段のテ格を取りえない。しかし(40)~(43)のように手段を表わすと考えられる動詞中止形では「ほす」も使える。この違いは、「ほす」が動的意味・静的意味の両方をもつことや他のさまざまな要因に、関わるものと思われ、現段階では結論をくだせない。

また、

- (8) 柿を ほす。

これは、干柿をつくることを意味する場合つまり静的意味についてのみ考えてみると、成分としての水分を取り除くときは、強い熱を短時間加える方法は「ほす」には不適當のように思われる。そうすることにより、もの自体が変質してしまうのではないだろうか。

以上から「かわかす」に関しては手段に制限がないことがわかるが、「ほす」に関しては一言でいいきことはできない。ここでもさまざまな事柄が関わりあってくるためさらに追求する必要がある、前述のテ格とテ形の問題とともに、今後の課題としたい。

#### 2.5. 慣用的表現

- (44) 甲羅を ほす。
- (45) 杯を ほす。

(44)(45)は共に水分を取り除く意味から転じた表現と考えられる。しかし水分を取り除くための状態にすること、つまり動的意味とは直接関係ないので、やはり慣用的表現とするべきである。

### 3. まとめ

#### ●「動詞のもつ意味」

「かわかす」は静的意味をもち動的意味をもたない。「ほす」は静的・動的意味の両方をもつが静的意味だけに用いることはできない。

静的意味とは、ものの水分を取り除くことである。また動的意味とは、ものの水分を取り除くための状態にすることであり、静的意味に先立って行われる。

#### ●「水分の状態と乾燥の手段」

「かわかす」は成分としての水分以外に対して用いられ、乾燥の手段は選ばない。

「ほす」に関しては、成分としての水分を取り除く場合はこれに限定され、自然な乾燥手段を用いなければならないが、成分以外の水分については、今後の課題とする。

#### ●「構文的特徴」

「かわかす」は場所を表す二格と共起しない。

「ほす」は手段を表すテ格と共起しない。

言語経歴：1960年9月大分県大分市生 0～  
18歳大分市 18歳～東京都目黒区

## はれる・むくむ

内田 眞由美

### 1. はじめに

「はれる」と「むくむ」は両語とも、人や動物の体の一部や全体がふくらむ現象を表わす動詞である。しかも、これらは正常な現象というより、病的な現象といえる。あるいは病的と言わぬまでも何らかの理由で、一時的に体がふくらむ現象を表わす動詞である。以下、この二語を分析していく。なお「はれる」と「むくむ」については、徳川・宮島1972の分析があるので、随時それを参考にしていく。

### 2. 分析

#### 2.1. 文型

(1) 寝不足で まぶたが はれる。

(2) 一日立っていたので 足が むくむ。

文型は「はれる」「むくむ」とも同じで、下のような型になる。

Aガ { はれる。  
むくむ。 (A:ふくらむ部分)

## 2.2. カ格にたつもの

ここでは、カ格にたつ「ふくらむ部分」について「はれる」と「むくむ」を比較する。

- (3) しもやけで 手が はれる。
- (4) 虫に刺されて 手が はれる。
- (2) 一日立っていたので 足が むくむ。
- (5) にきびが はれる。
- (6) 肩のきずが はれる。

「はれる」は(3)のように、カ格にたつ部分の全体がふくらむ場合と、(4)のようにカ格にたつ部分のさらに一部分がふくらむ場合がある。また、(5)(6)のように身体の部分を表わす名詞以外のものがかかることもある。「むくむ」はそれに対し、カ格で示す部分が全体にふくらむ場合のみ用いられ、カ格には身体を表わす名詞以外はないようである。

## 2.3. 原因

原因に関して、徳川・宮島1972では以下のように書かれている。

「むくむ」はからだ内部にかぎられるが、「はれる」は、なぐられるなど、外からの原因でもできる。  
(P. 326)

この記述は、原因を外からのものか、体の内部からかという点で比較している。それに従って、まず外からの原因について考えていく。

- (7) なぐられて ほおが はれる。
  - (8) \*なぐられて ほおが むくむ。
  - (9) 虫にさされた所が はれる。
  - (10) \*虫にさされた所が むくむ。
- (7)~(10)のように、ふくらんだのが、外から虫など何らかの物体が体に接触・作用したためであることがはっきりしている場合には、「むくむ」は使えないようである。

- (11) \*カイロを握っていると 手が はれる。
- (12) カイロを握っていると 手が むくむ。
- (13) 冬山で 凍傷で 手が はれる。
- (14) \*冬山で 凍傷で 手が むくむ。
- (15) やけどをして 顔が はれる。
- (16) \*やけどをして 顔が むくむ。
- (17) ? ストープで手をあぶっていると 掌が はれる。
- (18) ストープで手をあぶっていると 掌が むくむ。

まず(11)(12)は、カイロの接触が原因だが「むくむ」の方が適切である。その他の例にあらわれた原因は、熱や寒気など、無形ではあるが、外からの作用といえそうである。(12)(18)から考えると「むくむ」の原因は内部

に限られるとは言えないようである。

体内部の原因の場合はどうだろうか。

- (19) かぜで のどが はれる。
- (20) \*かぜで のどが むくむ。
- (21) ? 薬の副作用で 体が はれる。
- (22) 薬の副作用で 体が むくむ。
- (23) \*じん臓病で からだが はれる。
- (24) じん臓病で からだが むくむ。

内部の原因の場合、徳川・宮島1972に従えば、二語とも使えると考えられるが、(19)~(24)の例を見ると、片方が使えない、あるいは不自然な場合がある。以上から、外からの作用が原因か、内部の原因かという観点では「はれる」と「むくむ」の示差的特徴はとらえられないと思われる。

しかし、原因という点で二語の違いが全く表われないということもない。

まず「むくむ」は外からの作用が原因の場合は、その種類は熱や水などと少なく、量的にも内部の原因によるものが圧倒的に多い。

外からの作用による場合、作用の強さが、ふくらむ部分に、外傷等ふくらむ以外の何らかの表面的な変化をもたらすくらいの強さである時には「むくむ」は使わないという傾向がある。

また(3)(4)(5)(9)(13)(15)(19)~(24)のように、原因がやけどやじん臓病など、病的なもの(病気・怪我)である場合、「はれる」は、ふくらむ部分に原因が存在し、「むくむ」はふくらんだ部分と病気の部分とが違い、病気が内臓器官にあることが多いという傾向が指摘できそうである。例えば、鏡を見て顔がいつもよりふくらんでいる時に、「むくんでいるのかな、それとも、はれているだけかな」と考えることがあるが、この場合の「むくむ」は「内臓に病気がある」という意識と結びついていると考えられる。

## 2.4. 状態

状態の特徴を徳川・宮島1972は以下のように説明する。(i ii iiiの分類は筆者による。)

- i 「むくむ」はじん臓・かっけなどで、顔全体とか、足全体とかが、なんとなくふくれあがって、水気をふくんでいるようなばあいという。
- ii 「はれる」は、おでき・みみずばれのように、まったく部分的なものについてもいえる。
- iii 「むくんだ」状態について「はれている」とはあまり言わないが、絶対にいえないわけでもない。(P. 326)

これを大別すると「はれる」「むくむ」の各々の状態の説明(iとii),二語の関係(iii)の二点になる。が、状態の説明は「はれる」について、ほとんどされていない。そこで、iの「むくむ」の説明を次の三つに分ける。

- ① 水気について
- ② 「なんとなくふくれあがって」という部分——ここでは固さ・弾性ととらえる。
- ③ iiと関連して「部分」と「全体」

このうち③は、2.2.での分析に相当している。そこで①と②について「はれる」と比較して考えてみる。

#### 2.4.1. 水気

「むくむ」はiの説明のように、水気をふくんで、ふくらんだ状態を表わしていると考えられる。水気といっても水泡のように皮膚に水がたまるのではなく、皮膚下の組織の間に水分がたまつたような、ふくらんだ部分に重量感を感じる、また見る人にも感じさせるような状態である。

次に「はれる」の場合はどうだろうか。

(25) \*長い間海の中を漂っていたので 死体が はれている。

(26) 長い間海の中を漂っていたので 死体が むくんでいる。

(25)(26)のように、ふくらんだ部分に水気が含まれている場合には「はれる」は使えないようである。しかし、以下のように言うことは可能であると思う。

(27) 体が 水気を含んだように はれる。

この場合「むくむ」を使うと、かえってくだい感じになる。また、水気の変化は関係ないと思われる場合に「むくむ」は使えないが、「はれる」は使える。

(28) リンパ腺が はれる。

(29) \*リンパ腺が むくむ。

(1) 寝不足で まぶたが はれる。

(30) \*寝不足で まぶたが むくむ。

以上から「はれる」は、ふくらんだ部分の水気について、特定の状態を表わすことはないと考えられそうである。

#### 2.4.2. 固さ・弾性

「むくむ」の固さについての特徴を考えるためにまず、「むくむ」と「ふとる」が対比して使われている例を取りあげてみる。

(31) 「お婆ちゃん、おらげに来てから肥ったね」と、間貸している農家のおかみが言った。

「そうかしら、むくんでるんじゃないかしら。」

「うん、肥ったんだよ、むくみとは違よよ。…」

(『厭がらせの年齢』国立国語研究所1972の用例より一部抜粋(P. 402))

(31)は国研1972では「ふとる」と「むくむ」の対立の例として挙げている。これは、状態としては「ふとる」状態と「むくむ」状態が似ていることを示していると考えられる。したがって「むくむ」は、全体的に丸みを帯びて、柔らかそうな感じでふくらんだ状態であると言えそうである。2.4.1.で述べた重量感を感じさせるといふ事も「ふとる」との類似性に関係していると思われる。この点がiの「なんとなくふくれあがって」という説明に相当していると思われる。

弾性という点について「むくむ」は、ふくらんだ部分に弾性がなくなっている状態を表わすと考えられる。これは、今までの状態の特徴から推測できる。また、病気の症状の「むくみ」の場合、「むくみ」であるかどうかを判定するのに、ふくらんだ部分を押し確かめるといふやり方がある。押しできたくほみがなかなか消えない場合に「むくみ」であるという。この点からも「むくむ」は弾性がなくなること表わすと考えられるだろう。

では、「はれる」の固さや弾性についての特徴はどうか。

(32) 栄養失調で 腹だけが はれた 子供。

(33) \*栄養失調で 腹だけが むくんだ 子供。

(34) リューマチで 関節が はれる。

(35) \*リューマチで 関節が むくむ。

(36) 傷口が はれる。

(37) 泣くと 目が はれる。

(38) 唇が はれる。

「はれる」は、ふくらんだ部分に固さの変化がない、あるいはどちらかという固くなるという傾向があるようだ。けれども、

(39) 体が 指で皮膚を押すと凹み かなかもとに戻らないように はれる。

のように、何らかのこぼを加えることで「はれる」を用いて「むくむ」状態を表わすことは可能である。(日常では「むくむ」を使うだろうから、ほとんど使われないだろうが。)このように考えると、本質的には水気の場合と同様に、固さや弾性について特定の状態になることを意味していないと考えた方がよいと思われる。

#### 2.5. 「はれる」と「むくむ」の関係

2.4.1., 2.4.2.の整理を兼ね、状態について二語を

まとめてみる。「むくむ」は、ふくらむ部分が、全体的に、丸く、柔らかかそうに水気を含んだ感じでふくらみ、重量感を感じさせ、ふくらんだ部分の弾性がなくなっている状態を表わす。そして、「むくむ」が状態が細かく規定されるのに対し、「はれる」は水気・弾性などの細かな特徴を規定せず、何かの作用により体(の一部)が一時的にふくらんだ状態になることを表わしているだけだといえる。このため「むくむ」はカ格にたつ名詞が、身体を表わす名詞のみであるなど、「はれる」にくらべて制限が多い(2.2.)。また、「むくむ」の原因も「はれる」より範囲が狭く、内部からの作用が多いという「はれる」との違いがあると思われる(2.3.)。

ところで、上のように考えると「むくむ」は「はれる」に含まれるとも思われる。とすれば「むくむ」は「はれる」で言いかえ可能となるはずである。実際に以下の例もあった。

(40) かけになると足がはれる。(『外国人のための基本語用例辞典第二版』)

(41) 【むくみの現象として】まず目で見てみるとはれている(『ファミリードクター』P. 63)

(41)には問題はないが(40)は実際にはほとんど使わないし、(42) かけに になると 足が むくむ。

の方が、はるかに自然である。さらに(11)(17)(21)(23)(25)の例から考えても「むくむ」は「はれる」で言いかえられ

ると断定するより「むくんだ」状態は「はれている」と絶対に言いかえられないわけではないという程度の方が適切であろうと思われる。「はれる」は、状態の細かい特徴を規定しないために、ふくらんだ状態が「むくむ」の特徴を持っている時は使いにくくなるのだろう。また、2.3.に書いたように、原因に関して内臓の病気イコール「むくむ」という意識があるためとも考えられる。したがって「はれる」は「むくむ」状態以外の場合に使われる傾向が強いようだ。

### 3. まとめ

「はれる」

○カ格にくるものの全体、あるいは一部が外からの作用や体の内部の原因により、ふくらんだ状態になることを表わす。

「むくむ」

○カ格にたつものの全体が、外からの作用もあるが主に体の内部の原因により、ふくらんだ状態になることを表わす。

○カ格にたつ部分が、全体的に、丸く、柔らかかそうに水気を含んで重量感を感じさせるようにふくらみ、弾性がないという状態になることを表わす。

言語経歴：1960年7月東京都大田区に生まれ現在に至る。

## 参考文献一覧

ここに掲げる参考文献は、本書の意味論関係の論文で言及したり、参考にしているものを一括して、文献の編著者の五十音順に並べたものである。ただし、参考にしているものは、日本語の動詞を何らかの形で扱っているものに限った。この他の多くの文献も参考にしているが、主なものを示した。御理解、御寛恕いただきたい。

- 池上嘉彦1975 『意味論』 大修館書店  
———1981 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店  
浦田卓・亀谷了編1978 『ファミリードクター』 光風社書店  
大野晋・柴田武編1977 『岩波講座日本語9 語彙と意味』 岩波書店  
金田一春彦・池田弥三郎編1978 『学研国語大辞典』 学習研究社  
国広哲弥1967 『構造的意味論——日英語対照研究——』 三省堂  
———1970 『意味の諸相』 三省堂  
———1982 『意味論の方法』 大修館書店  
———編1982 『ことばの意味3』 平凡社  
見坊豪紀他編1982 『三省堂国語辞典 第三版』 三省堂  
国立国語研究所1964 『分類語彙表』 秀英出版  
———1972 『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版  
阪倉篤義(司会)1975 『シンポジウム日本語3 日本語の意味と語彙』 学生社  
柴田武編1976 『ことばの意味1』 平凡社  
———編1979 『ことばの意味2』 平凡社  
新村出編1976 『広辞苑 第二版補訂版』 岩波書店  
徳川宗賢・宮島達夫1972 『類義語辞典』 東京堂  
時枝誠記・吉田誠一編1973 『角川国語中辞典』 角川書店  
中本ゼミ編1978 『日本語研究』第1号 東京都立大学国語学研究室  
中本正智1980 『日本語の表現と構造』 エポナ出版  
———1981 『日本語の原景』 金鶏社  
西尾実他編1979 『岩波国語辞典 第三版』 岩波書店  
日本語研究会編1979 『日本語研究』第2号 東京都立大学国語学研究室  
———編1980 『日本語研究』第3号 東京都立大学国語学研究室  
———編1981 『日本語研究』第4号 東京都立大学国語学研究室  
日本大辞典刊行会編1972—76 『日本国語大辞典』 小学館  
服部四郎1960 『言語学の方法』 岩波書店  
———1968 『英語基礎語彙の研究』 三省堂  
久松潜一他編1974 『改訂新潮国語辞典』 新潮社  
文化庁1975 『外国人のための基本語用例辞典 第二版』 大蔵省印刷局  
森田良行1977 『基礎日本語1』 角川書店  
———1980 『基礎日本語2』 角川書店  
山田忠雄他編1981 『新明解国語辞典 第三版』 三省堂